

## 子どもたちによるお茶の味に対する評価の実践

福島三穂子（コミュニケーション研究室）

権賢貞（帝京大学 外国語学部）

### 1. はじめに

近年、緑茶を急須で淹れる習慣を持たない家庭が増えている。そもそも急須自体を持たない生活の中では、日常的に茶葉を使って淹れたお茶を飲む機会がないため、子供たちも急須や茶葉に触れた経験が少ない。このような社会生活の変化は、子供たちがお茶を味わう方法を持たなくなったことを意味するのだろうか。

本稿では、小学6年生の子どもたちが、4種類のお茶を飲んだ後、お茶の味についてグループディスカッションをしているデータを分析する。そのディスカッションの中で、子どもたちが、お茶の味にどう志向し、どのお茶が好みかという価値観をどう認識しているかを、会話の詳細な分析を通して明らかにする。彼らは、お茶を日常的に飲まないが、彼らなりにお茶を判別し、それぞれの味を定義づけている。その彼らの味を評価する方法とは何か明らかにしたい。

### 2. 背景

宮崎のお茶産業は、生産量が全国4位であるにも関わらず、静岡や鹿児島影に隠れその知名度は低い。また茶畑が身近にあっても、宮崎県や自分の住む県内の地域がお茶の名産地であることを認識していなかったり、茶葉を使ったお茶を飲んだ経験が少ない子どもたちが多く、茶葉に関わる人々への聞き取り調査から明らかになっている。全国的にも、茶葉を使ったお茶の消費量は減っており（図1参照）、宮崎県でもお茶の生産量も生産者数も減少していることが懸念されている。そのため県内ではお茶文化の継承につながる様々な茶育活動

が行われている。多くの場合学校の家庭科や総合学習の時間を使って行われる。生産農家やJAの職員などが講師役になり、茶葉の量、お湯の温度、抽出時間などを、急須を使った正しいお茶の淹れ方として教える。

本稿は、大学と小学校が連携した茶育活動の現状を理解するために、子供たちがどうお茶の味に志向しているのかを明らかにし、長期的には今後の茶育活動への貢献を目指すものである。

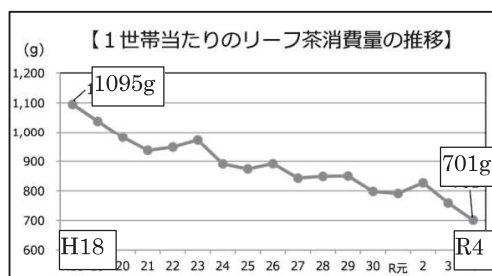


図1 1世帯当たりのリーフ茶消費量の推移  
農林水産省ホームページ (R6.1.15 アクセス)

### 3. データ

2023年7月15日に、宮崎大学教育学部附属小学校のPTCA活動 (PTA+Community)として、「世界農業遺産地域にある釜炒り茶を知ろう」をテーマに、大学教員4名、大学生4名が、小学生98名、保護者98名、小学校教員数名と一緒に、お茶に関する講義、お茶の飲み比べの実験等を行った。その際、小学生は各自配布されたお茶飲み比べシートに記入し（図2参照）、その後5人程度のグループになって、飲み比べに関する意見交換をした。本稿で使用するデータは、この意見交換の場面をビデオ撮影、およ

び音声録音したもので、分析に際し、会話分析の文字起こしの方法に従いトランスクリプトに書き起こした（記号に関しては付録参照）。また、活動後に行なったアンケート調査の結果も参考にしている。アンケート調査では、77名からの回答があり「どのお茶が好きだったか」を選んだのちに、その理由を自由記述して貰った（図3参照）。記述として一番多かったのが、甘みに関する記述で30記述、次に馴染みがあるが27記述、次に、香りの良さに言及しているものが17記述、そして、苦くないという記述も7記述あった（図4参照）。

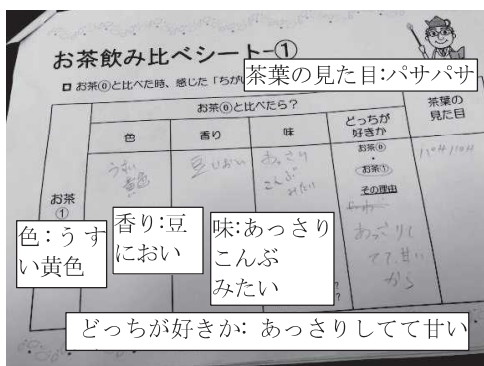


図2 お茶飲み比べシート

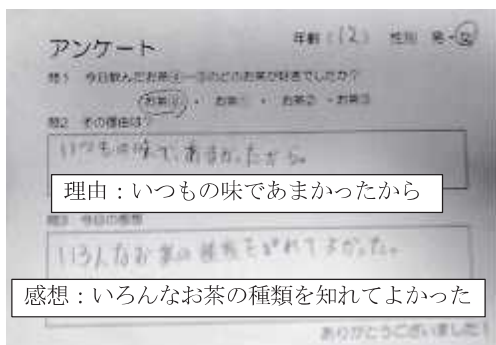


図3 アンケート:「今日飲んだお茶①～③のどのお茶が好きでしたか?」

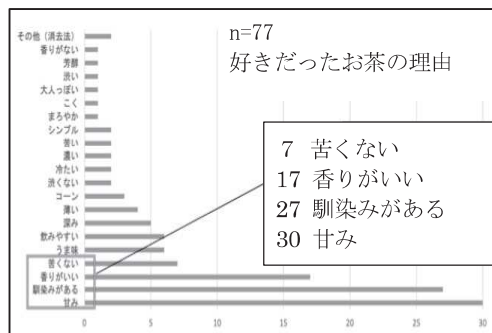


図4 アンケート結果:好きだったお茶の理由

筆者作成

#### 4. 子供たちによるお茶の評価

子供たちは、配布されたワークシート「お茶飲み比べシート」を参考に、飲み比べを行いメモを記述している。そこには、色、香り、味についてメモする欄、基準茶である①番の「おーいお茶」と比較してどちらが好きか丸をつけてその理由を書く欄、また茶葉の見た目をメモする欄がある（図2参照）。これらの項目は、緑茶の品評会で使用される評価方法を参考にしたものであり、一般的にお茶の味の評価は「甘み、苦味、渋み、うま味」のバランスが重要視される。

しかし、そういったお茶の世界で一般的に使われる評価指標に照らし合わせながら、子供たちが美味しいお茶として選択した結果を吟味することが本稿の目的ではない。G.サーサスの言葉を借りれば、「抽象的な用語から作られたり研究対象の現象とは関係のない外部の研究領域で創造された理論的な顕微鏡のようなものを使う必要はない」（Psathas 1995=北澤・小松 1998;p.22）ということである。子供たちが子供たち自身の方法で、彼ら自身のことばを使って、色や香りを資源とし味を評価しているプロセスに焦点を当て、そのありのままの実践を記述することがここでの目的である。

以下では、本稿で言う彼ら子供たち自身の方法とはどのようなやり取りを意味しているの

かを明らかにするために、話し合いの場において、子供たちはお茶の味を語る上で、どう味に志向しているのかに注目し、香り、色、味への言及を手がかりに、会話の断片を見ながら分析をしたい。図5と図6で示すように、子供たちは、お茶比べシートを手を持ちたり、床に置いたりしながら、既に記述した内容について言及したり、新たに記述を加えたりしながらディスカッションを行なっている。



図5 グループA ディスカッションの様子

#### 4.1 香り

図5に示す通り、ここでは5人の子供たち（B1, G1, G2, G3, G4）が意見交換している。以下の会話の断片では、2番のお茶が好きだった理由について語る際、子供たちは香りに言及している。香りは、自分たちの知っている香りとの比較をすることで、2番のお茶の香りにポジティブな評価をしている。今まで香ったことのない緑茶の香りについて評価をする際、子供たちは、香ったことがない、知らないなど、経験がないことを問題にはしていない。既に知っているスイートコーン(13行目)や枝豆(16・18行目)や大豆の香り(18行目)に言及することで、つまり彼ら自身が持つ方法を使って、未知だった緑茶の香りを表現し、お茶の評価の実践を可能にしていることが分かる。

#### 【断片1】グループA

- 1 G2: ね, どれが一番良かった?
- 2 G3: やっぱ[2番やっぱ]2番.
- 3 G1: [3かな.]
- 4 (.)
- 5 G2: 2番?
- 6 G3: 2番[2番.]
- 7 B1: [おれゼロ.]
- 8 G3: え,
- 9 B1: ゼロ番. ゼロ番.
- 10 G3: 2番さ, (.)香ばしい: (.)あの
- 11 お茶ならでの.
- 12 G4: だって2番てさ, なんかあの
- 13 スイートコーンの香りしたじゃない?
- 14 G1: ¥そうなの?¥
- 15 B1: 1番
- 16 G3: 枝豆の香りもした.
- 17 G2: そう[なの?]
- 18 G3: [大豆とか枝豆の香り.]

#### 4.2. 色

以下の会話の断片は、断片1の続きで、グループAの子供たちが3番のお茶が苦かったことについて語っている。その際、様々なネガティブな要素を挙げる。そこでは色にも言及し(78行目)、濃い色と苦い味の関係性を見出していることが分かる(83・85行目)。

#### 【断片2】グループA

- 75 G3: やっぱ3番あれだよ.(0.2)苦い
- 76 からさ,
- 77 G4: う:ん.
- 78 G?: 紅[茶の色が-
- 79 G4: [後味もあんまよく[なかった:..
- 80 G3: [うん:後味
- 81 やばい.[あと:
- 82 G2: [後味やばい.
- 83 G3: 黒い色が[あの:
- 84 G4: [あ::あ.
- 85 G3: だから苦いのかな.

#### 4.3 味

録画した会話の中で、子供たちは、味の評価をする際、甘い味をポジティブに評価し、苦い味をネガティブに評価している。以下の断片では、

既に苦さを理由に否定的な評価を下した3番のお茶について、どうしたら美味しくなるのかについてアイデアを出している。

### 【断片3】グループA

- 41 G3: 3番に蜂蜜入れたら(.)美味しくなる  
42 かな.  
43 (0.4)  
44 G3: 甘くなくて.  
45 G1: [あそっか. あんたは地獄を  
46 見てたやな. ((G2を見ながら))  
47 G3: めっちゃ苦かった. 3番.

41行目で、蜂蜜を入れたら美味しくなるかもしれないと、甘みを加えることで美味しくできるのではないかと発話している。つまりここでG3は、1) 3番のお茶は、そのままでは美味しくないと表現しているだけでなく、その味をどう美味しい味に近づけられるのかという自分なりの方法を提示していて、2) その解決策として蜂蜜という甘味を加えることでそのお茶を甘くすることが可能なのではないかと、甘みと美味しさの関係性をポジティブに結びつくものとして当たり前前提に捉えていることが分かる。

味について、子供たちは別の方法も表示している。次の会話の断片は、別のグループであるグループCで交わされた会話からの抜粋である。図6で示す通り、断片4は、Ga, Gb, Gc, Ge, Gdの5名が話し合っている所に、T1が質問をしている場面である。彼らは、彼らの経験や記憶に言及することで味の評価を可能にしている。

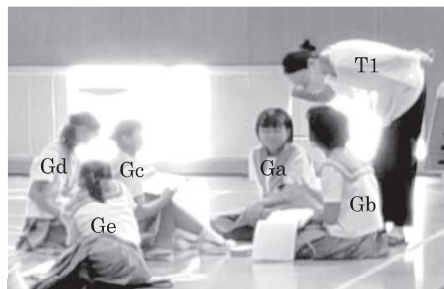


図6 グループC ディスカッションの様子

### 【断片4】グループC

- 01 T1: 一番美味しいお茶とか決まりましたか？  
02 　　た: ?  
03 Ga: おーいお茶です。  
04 T1: あ hehe [hehe  
05 Gd: [おーいお茶です。  
06 (2.0)  
07 Ga: 何かいつも飲んでるからさ: .  
08 　　いつもの味が一番何かほっとする?  
09 　　(.) 感じしない? 何か?  
10 Gd: ん: 何か[も:  
11 Gb: [え: 何かあの: 何か他のお  
12 　　茶: 飲んだ後だと: 甘く感じる:  
13 Ga: ↑ん[:  
14 Gd: [あ: 確かに何か:  
15 Ga: 慣れない味だと何か違和感がある.  
16 Gb: ん: ん:

Gaは一番美味しいお茶をおーいお茶とし(3行目)、「何かいつも飲んでるからさ:」(7行目)と味に馴染みがあることを理由として提示している。「いつも飲んでる」(7行目)と言う表現から「いつもの味」(8行目)は「ほっとする」(8行目)と表現を変え、おーいお茶が、馴染みがあり、またそれはほっとするという評価をしている(Pomerantz 1984)。しかし直後、短い間合いを挟んで「感じしない? 何か?」(9行目)と付け加え、賛同を得ようとする(Schegloff 2007)。Gd(10・14行目)とGb(11・12行目)は、それに対しすぐには明確に同意を示さない。すると、Gaは、更に「慣れない味だと何か違和感ある」と別の表現方法を使って、自分の主張、つまり馴染みのある味と美味しさ

の関係性を強化する。

断片5は、断片4の続きである。Gcが2番のお茶を選んだ理由として、「まやっぱ:おじいちゃんとかおばあちゃんたちの家で:飲むから好き:みたいな」(27-29行目)と、お茶の味に結びつく、記憶の中の場所や一緒に飲む人に言及する。Gdも「あ::それあるかも」とGcに対して同意を示す(31行目)

#### 【断片5】グループC

27 Gc: あたしは2なんだけど、まやっぱ:  
28 おじいちゃんとかおばあちゃんたち  
29 の家で:飲むから好き:みたいな  
30 Ga: あ:  
31 Gd: あ::それあるかも  
32 Gc: ま:そうじゃなかったら:絶対もう家  
33 で飲むおーいお茶  
34 Gd: あ:

以上のように、子どもたちの相互行為から、香り、色、味の評価は、様々な方法で子供たちによって実践されていることが分かった。

#### 5. まとめ

子供たちは、味覚という感覚を資源とし、彼ら自身の方法を使って協同的にお茶の味の評価を実践していた。彼らがお茶の味に対してどう志向していたか、彼らの会話の断片を見ることで明らかにした。子供たちの相互行為において、お茶の味は、甘いものはポジティブに、苦いものはネガティブに評価され、色や香りもその評価に関連付けるかたちで、好きなお茶の判断を支持する要因として扱われていた。また、お茶の味を表現する際、自分たちの経験や記憶に言及し、馴染みがあることは味の評価にポジティブに作用していた。これらの発見は、彼らがどうお茶の味に志向しているのかという、彼ら自身の味に対するローカルな定義づけの方法であり、それはアンケートの記述からだけでは見えてこない、子供たちの味の評価の実践そのもの

なのである。

#### 6. 考察

今回の分析の結果を踏まえると、宮崎のお茶の魅力を子供たちに継承したいと考える時、子供たちの目線に立って、お茶の味に向き合う必要があるのかもしれない。子供たちが美味しいと感じる味をもって宮崎のお茶を体感して貰うことが効果的であり、それには、大人の考える美味しさをそのまま子供たちに教えるのではなく、子供たち自身が美味しいと評価する味を我々が知ることが必要不可欠なのではないか。今回の分析では、お茶の専門家の大人が考える「正しいお茶の淹れ方」は、子どもたちにとって美味しいお茶の淹れ方ではないかもしれないという問題が明らかになった。

今後の茶育活動では、今回の分析を参考に、例えば甘みが最も強く味をえる、お茶の品種やお茶を入れる際の温度などを工夫する必要があるのではないかと考える。それには、茶業関係者と連携することが不可欠であり、彼らとのネットワーク作りも大切にしていきたい。

県内の子供たち自身が彼らの生活の中にお茶を取り入れ、その価値を理解し、彼ら自身がお茶の魅力を伝承する媒体となれば、宮崎県が誇るお茶の生産量を増やし、経済効果に繋がっていく。そのためには、お茶が持つ様々な味を、子どもたちが理解する仕組みが必要になる。今回明らかになった彼らのお茶の味に対する評価の方法は、その仕組み作りにおいて、何らかの指標になるのではないかと考える。

【謝辞】データ収集に際し、宮崎大学教育学部附属小学校の関係者の方々にご協力頂きました。ここに感謝の意を表します。また本研究は、地域資源創成学部の学部重点経費のサポートを頂きました。感謝申し上げます。

—— 参考文献 ——

- 北澤裕・小松栄一 (1998)『会話分析の手法』マル  
ジュ社 (George Psathas (1995), *Conversation  
Analysis*, Sage Publications)
- Pomerantz, Anita (1984), “Agreeing and  
Disagreeing with Assessments: Some  
Features of Preferred/Dispreferred Turn  
Shapes”, Atkinson, M, & Heritage, J (Eds.),  
*Structures of Social Action: Studies in  
Conversation Analysis*, pp. 57-101  
Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, A. Emanuel (2007), *Sequence  
Organization in Interaction: A Primer in  
Conversation Analysis, Volume 1*, Cambridge  
University Press.
- 農林水産省「茶をめぐる情勢」  
[https://www.maff.go.jp/j/seisan/tokusan/cha/att  
ach/ppd/ocha-59.pdf](https://www.maff.go.jp/j/seisan/tokusan/cha/attach/ppd/ocha-59.pdf) (2024年1月15日取得)

—— 付録 ——

トランスクリプトの表記法

- [                    発話の重なりの開始位置。  
]                    発話の重なりの終了位置。
- (m.n)              間合いの秒数。  
(.)                  0.2秒以下の短い間合い。
- 文字::              直前の音が延ばされている。  
文字 -              発話が中断されている。  
文字.                尻下がりの抑揚。  
文字?               尻上がりの抑揚  
文字、              発話がまだ続くように聞こえる抑揚。  
.hh                  息を吐く音。笑いの場合もある。  
hh                   息を吸う音。笑いの場合もある。  
文字                下線部分が強調されている。  
¥文字¥             笑い顔で発話れている。  
(文字)              はっきり聞き取れない部分。  
((文字))            データについての様々な説明。

# Children's Ways to Evaluate the Taste of Tea

Mihoko FUKUSHIMA (Communication Laboratory)

Hyun-Jung KWON (Faculty of Language Studies, Teikyo University)

## Abstract

In recent years, an increasing number of households do not have the custom of brewing green tea in a teapot. Naturally, children have little experience with teapots and tea leaves, as they do not have the opportunity to drink tea brewed with tea leaves; instead, they drink tea from the pet bottles at home. Does this change in social life mean that children no longer have a way to taste tea? In this paper, we analyze the discussions among sixth-grade elementary school students who are exchanging ideas about the taste of tea after tasting four kinds of tea. In the discussion, we will use conversation analysis as an analytical method to clarify how the children orient themselves to the taste of tea and how they perceive the taste of tea as tasty or not tasty. Although they do not drink tea brewed with tea leaves on a daily basis, they make judgement on teas in their own way and define each taste. We would like to reveal the ways in which they establish their evaluation of the taste of tea through their interaction.